

資治通鑑 第172 卷

【陳紀六】 起旃蒙協洽，盡柔兆涸灘，凡二年。

■陳、●北周、**北齊**北齊、続国訳漢文大成 經子史部 第10 卷 107p

高宗宣皇帝中之上太建七年（乙未，575年）

■春，正月，辛未（7+60-52+1=16日），上は南郊に祀す。

●癸酉（9+60-52+1=18日），周主は同州に如く。

■**北齊**乙亥（11+60-52+1=20日），左衛將軍の**樊毅**は潼州（五代志に、下邳郡夏丘県に梁・後齊は潼州を置き、取慮城に治す。安徽省淮泗道泗県、現・宿州市泗県）に克つ。

北齊齊主は鄴に還る。（去年二月に晉陽に行き思好を討ち、繼いで行に還り、八月復た晉陽に行く）

■辛巳（17+60-52+1=26日），上は北郊に祀す。（陳の制では間歳正月上辛を以て特牛一を用いて天地を南北郊に祀る。間歳とは一歳は南郊な祀り、一歳は北郊に祀る）

■二月，丙戌（22-22+1=1日）朔，日之を食する有り。

■**北齊**戊申（44-22+1=23），**樊毅**は下邳、高柵（下邳郡に柵淵県有り、武定八年に宿豫を分けて置く。江蘇省徐海道宿遷県、現・宿遷市宿豫区）等六城に克つ。

北齊〔無愁天子の弱顏奢侈惡趣味〕齊主は言語澀訥（説話遲鈍困難）にして，朝士を見るを喜ばず，寵私暱狎に非ざるよりは，未だ嘗て語を交えず。（10-108p）性は儒にして，人の視るに堪えず（所謂弱顏），三公は、令（尚書令）、録（録尚書事）の事を奏すると雖も，仰ぎ視るを得る莫く，皆な略ぼ大指を陳べ，驚き走り而して出ず。世祖の奢泰之餘を承け，以為えらく帝王は當に然るべしと，後宮は皆な寶衣玉食し，一裙之費えは，直は萬匹に至る。競いて新巧を為し，朝に衣て夕べには弊る。盛んに宮苑を修め，壯麗を窮極す。好む所は常ならず，數々毀ちて又た復す。百工土木，時に休息する無く，夜は則ち火を然して照作し，寒きには則ち湯を以て泥を為し。晉陽の西山を鑿ちて大像を為り，一夜に油萬盆を然やし，光は宮中（晉陽宮中）を照らす。災異寇盜有る毎に，自ら貶損せず，唯だ多く齋を設け，以て德を修むと為す。自ら琵琶を弾くを好み，《無愁》之曲（五代志に曰く、帝は絃に倚りて歌い、別に新聲を採り、無愁曲を為る。音韻窈窕として哀思を極める。胡兒の閨宦輩をして齋しく之を唱和せしむ。曲終わり楽闌れば、涙を隕さざる無し。行幸の道路と雖も、或は時に馬上に之を奏し、往を楽しみ来を哀しみ、竟に以て國を滅ぼすと）を為り，近侍の之に和する者は百を以て數え，民間は之を「無愁天子」と謂う。華林園（鄴都にあり）に於いて貧兒村を立て，帝は自ら藍縷（穿弊した威服）之服を衣，行々其の間に乞いて樂しみと為す。又た西鄙の諸城を寫築（複写建築）し，人をして黑衣（周の戎衣）を衣て之を攻め使め，帝は自ら内參（諸々の閹宦）を帥いて拒ぎ闘う。

北齊〔齊主の政治の乱脈、官位乱発〕陸令萱、穆提婆、高阿那肱、韓長鸞等を寵任し朝政を宰制せしめ，宦官の鄧長顓、陳德信、胡兒の何洪珍等は並びて機權に參預し，各々親黨を引き，超えて顯位に居らしむ。官は財に由りて進み，獄は賄を以て成り，競いて奸諂を為し，政を蠹し民を害す。舊の蒼頭の劉桃枝等は皆な開府封王なり，其の餘の宦官、胡兒、歌舞人、鬼を見る人、官奴婢等の濫りに富貴を得る者は，殆んど將に萬を數えんとし，庶姓の王に封じられる者は百を以て數え，開府は千餘人，儀同は數無く，領軍は一時に二十人に至り，侍中、中常侍は數十人，乃ち狗、馬及び鷹に至るまで亦た儀同、郡君之號有り，門雖有り，開府と號し，皆な其の干祿（官職相當の俸祿）を食す。諸々の嬖倖は朝夕左右に娛侍し，一戲之賞は，動もすれば巨萬を逾える。既に而して府藏は空竭し，乃ち二三郡或は六七縣を賜わり，之をして賣官

して直を取ら使む。是に由りて守令と為る者は、率ね皆な富商大賈にして、競いて貪縦を為し、賦は繁く、役は重く（続は欠）、民は生を聊^{やす}んぜず。

【北周は北齊攻略を検討】

●北齊 「齊を油断させる策」 周の高祖は齊を伐たんと謀り、邊鎮に命じて儲侍（貯蓄）を益し、戍卒を加えしむ。齊人は之を聞き、亦た守禦を増修す。柱國の於翼は諫めて曰く、

「疆場は相い侵し、互いに勝負有り、徒らに兵儲を損し、無大計に益無し。如かず嚴を解きて好みを繼ぎ、彼をして懈^{おこた}りて而して備え無から使め、然る後に間に乗りて、其の不意に出、一舉に取る可き也。」
周主は之に従う。

● 「韋孝寬の三策」 韋孝寬は上疏して三策を陳ず。其の一に曰く、

「臣は邊に在ること積年、頗る間隙を見る、際會に因らざれば、以て成功し難し。是を以て往歲（周主は保定の始めに再び齊を伐ちて并州を攻め、洛陽を囲み懸弧に趣き、軹關に出で、皆功無き事は169卷世祖天嘉四年五年にあり。宜陽を争い、汾北を争う事は170卷太建元年より三年にあり）軍を出し、徒らに勞費有り（10-109p）、功績立たざるは、機會を失いしに由る。何となる者？長淮之南は、舊は沃土為れば、陳氏は破亡の餘燼（陳氏は梁の元帝の江陵破亡の後を承けて餘燼を収合し、国を江南に建てる）を以て、猶ほ能く一舉して之を平らぐ。齊人は歷年赴きて救い（前卷五年六年にあり）、喪敗し而して返す。内離れ外叛き、計は盡き力は窮まり、讎敵に讐有るは、失う可からざる也。今大軍が若し軹關に出れば（鄴までは阻險無く）、軌を方^{なら}べ而して進めば、兼ねて陳氏と共に犄角（陳と約して共に攻めんと欲す）を為し、並びに廣州の義旅をして三鴉（魏の永安中に廣州を魯陽に置く。魏は東西に分け、西は三鴉谷に属す。魯陽の界に在り。河南省汝陽道南召県の東北、現・南陽市南召県）より出で令め、又た山南（周は長安にあり、その山南）の驍銳を募り、河に沿い而して下らしめ、復た北山の稽胡（南匈奴の余種、散じて河東西河の郡界に在り、山に阻して居り、長安の北に在り）を遣わし、其の並、晉之路を絶たしめん。凡そ此の諸軍は、仍って各々をして關、河之外（齊の境界の民）の勁勇之士を募ら令め、其の爵賞を厚くし、前驅（郷導）を為さ使めん。岳は動き川は移り、雷は駭き電激し、百道より俱に進み、並びに虜庭に趨かん。必ず當に旗を望みて奔潰し、向かう所摧殄し、一戎にして大いに定まる（武王は紂を伐ち、一たび戎衣して天下定まる）は、實に此の機に在り。」

其の二に曰く、

「若し國家更に後圖を為せば、未だ即ち大舉せず、宜しく陳人と其の兵勢を分けん。三鴉以北、萬春（周と齊の境界、山西省河東道河津県東北、現・運城市河津市）以南、廣く屯田を事とし、預め貯積を為し、其の驍悍を募りて、立てて部伍と為す。彼は既に東南に敵（陳）有り、戎馬相い持てば、我が奇兵を出し、其の疆場を破らん。彼が若し師を興こして赴援すれば、我は則ち壁を堅くして野を清め、其の去ること遠きを待たん、還りて復た師を出さん。常に邊外之軍を以て、其の腹心之衆を引き。我は宿舂（莊子に、百里に適く者は宿に糧を舂く）之費え無く、彼は奔命之勞有り、一二年中に、必ず自ら離叛せん。且つ齊氏は昏暴なり、政は多門に出、獄を鬻ぎ官を賣り、唯だ利を是れ視、酒色に荒淫し、忠良を忌害し、闔境（辺境地帯）は嗷然（騒然）として、其の弊に勝えず。此を以て而して觀れば、覆亡するを待つ可し、然る後に間に乗りて電掃すれば、事は枯れたるを摧^{くじ}かんに等し。」

其の三に曰く、

「昔勾踐（左傳に、伍員曰く、越は十年生業し十年教訓す。二十年の外、吳其れ沼と為らんか）は吳を滅ぼすに、尚ほ十載を期す。武王（周の武王は三年の喪有り、兵を孟津に觀す。諸侯は期せずして会する者八百。皆曰く、紂伐つ可しと。武王曰く、汝未だ天命を知らずと。乃ち師を還す。三年紂は淫暴益々甚だし。武王は諸侯に告げて曰く、殷は重罪有り、伐たざる可からずと。遂に復た紂

を伐ち、之を滅ぼす)は紂を取るに、猶ほ再舉を煩わせり。今若し更に遵養(詩魯頌に、於鑠たる王師、時晦を遵養すと。

文王は殷の叛国を率いて以て紂に事え、是の晦昧の君を養い、以て其の惡を老いしむるを言う)を存し、且つ復た時を相^みば、臣は謂うに宜しく還た鄰好を崇び、其の盟約を申^{かき}ね、民は安んじ衆を和し、商を通じ工を恵み、銳を蓄え威を養い、鬯を觀て而して動くべし。(10-110p)斯れ乃ち長策をもて遠く馭し、坐して自ら兼併する也。」

書奏し、周主は開府儀同三司の伊婁謙(拓跋氏が代北に興るや、獻帝は其の次弟を伊婁氏とす)を引いて内殿に入り、從容として謂って曰く、

「朕は兵を用いんと欲す、何者をか先と為さん？」

對えて曰く、

「齊氏は倡優に沈溺し、麴薛に耽昏す。其の折衝之將の斛律明月(前卷四年にあり)は、已に讒口に斃れる。上下は離心し、道路は目を以てす(本は周語の言。道路は目を以て相視て敢えて言わざるなり)。此れ取り易き也。」

帝は大いに笑う。(その視る所と一致していて喜ぶ)

●北齊三月、丙辰(52-51+1=2日)、謙をして小司の寇元衛と齊に聘し以て鬯を觀使む。

●丙寅(2+60-51+1=12日)、周主は(同州より)長安に還る。

■夏、四月、甲午(30-21+1=10日)、上は太廟を享く。

■監豫州の陳桃根は青牛を得、之を獻じ、詔して遣りて民に還す。又た表して織成羅文錦被各々二百首を上り、詔して雲龍門外に於いて之を焚く。

北齊庚子(36-21+1=16日)、齊は中書監の陽休之を以て尚書右僕射と為す。

■六月、壬辰(28-20+1=9日)、尚書右僕射の王瑒を以て左僕射と為す。

北齊甲戌(10-20+1=?、庚戌なら46-20+1=27日)、齊主は晉陽に如く。

●秋、七月、丙辰(丙戌×、52-49+1=4日)、周主は雲陽宮に如く。

●[楊堅は姿相奇偉、王の風格]大將軍の楊堅は姿相奇偉なり(楊堅は龍顏にして額に五柱有り頂に入り、目光外射す。文有り手に在り、王と曰う。長上短下、沈深嚴重なり)。畿伯(周が置く、大司徒に属す。方毎に畿伯あり、中大夫なり。県毎に小畿伯あり、下大夫なり)下大夫の長安の來和は嘗て堅に謂って曰く、

「公は眼は曙星の如く、照らさざる所無し、當に王として天下を有つべし、願わくは誅殺を忍べ。」

●[周主は楊堅を警戒]周主は堅を待つこと素より厚く、齊王の憲は帝に言^{つて}て曰く、

「普六茹堅(楊堅の父の忠は周の太祖・宇文泰に従つて、屢々戦功有りて姓の普六茹を賜る)は、相貌は常に非ず、臣は之を見る毎に、覺えず自失す。恐らくは人の下に非ず、請う早く之を除け！」

帝も亦た之を疑い、以て來和に問う。和は詭りて對えて曰く、

「隨公は止だ是れ節を守る人、一方に鎮す可し。若し將領と為れば、陳破れざる無し。」

●丁卯(3+60-49+1=15日)、周主は長安に還る。

【北周の洛陽方面侵攻、病で中止】

●[周主は北齊侵攻計画]是より先、周主は獨り齊王の憲及び内史の王誼と齊を伐つを謀り、又た納言(周の保定四年に宗伯を改めて納言と為す)の盧^{じつ}輜を遣わして駟(駟伝)に乗ること三日(日を補充)安州(周は安州を安陸に置く、湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市)の總管の於翼に詣りて策を問わしむ、餘人は皆な之を知るもの莫し。丙子(12+60-49+1=24日)、始めて大將軍以上を大德殿に召して之を告ぐ。

●[北齊侵攻開始]丁丑(13+60-49+1=25日)、詔を下して齊を伐つ、柱國の陳王の純、滎陽公の司消難、

鄭公の**達奚震**を以て前三軍の總管と為し、越王の**盛**、周昌公の**侯莫陳崇**（既に保定三年に死す。別の人か文字誤り）、趙王の**招**を後三軍總管と為す。齊王の**憲**は衆二萬を帥いて黎陽に趨き、隨公の**楊堅**、廣寧公の**薛迴**は舟師三萬を將いて渭より河に入り、梁公の**侯莫陳芮**は衆二萬を帥いて太行道（河陽の北に在り、之を守り、以て并州冀州殷州定州の兵を断たんと欲す）を守り、申公の**李穆**は（10-111p）衆三萬を帥いて河陽道（河陰より北して河を度り、河陽と為す。將に河陽洛陽を攻めんとす、之を守り、以て其の相い往来するを断つなり）を守り、常山公の**於翼**は衆二萬を帥いて陳、汝（於翼をして安州より陳汝に出でしむ。齊王憲より以下、皆諸將の出づる所の道を指授するなり）に出る。**誼**は、盟（周初の功臣）之兄孫なり。**震**は、**武**（周初の功臣）之子也。

●**北齊** **[反対あるも、河陽から晉陽を目指す]** 周主は將に河陽に出んとし、内史上士の**宇文弼**は曰く、「**齊氏**は建國し、今に於いて累世なり。無道と曰うと雖も、籓鎮之任は、尚ほ其の人有り。今之師を出すや、^{かなら}要^{かなら}ず須く地を擇ぶべし。河陽は衝要、精兵の聚まる所なり、力を盡くして攻圍するも、恐らくは志を得るに難し。臣が見る所の如し、汾曲（汾水の曲がり）に出れば、戍小にして山平らかなれば、之を攻めるに抜き易からん。武を用いる之地、此より過ぎる莫し。」

民部（大司徒に属す）中大夫の天水の**趙熒**は曰く、

「河南、洛陽は、四面に敵を受け、^{たと}縦え之を得るも、以て守る可からず。請う河北より（蒲晉に出で晉陽に至るの路なり。其の後周主は再挙し卒に此に出る）直ちに太原を指し、其の巢穴を傾け、一舉に而して定める可からん。」
遂伯（蓋し周官の遂師の職に彷彿たり。周の地官の属に左右遂伯あり、中大夫なり。小遂伯は下大夫、郷毎に一人）下大夫の**鮑宏**は曰く、

「我は強く齊は弱し、我は治まり齊は亂れ、何ぞ克たざるを憂えん！但だ**先帝**は往日屢々洛陽に出、彼は既に備え有り、毎に捷たざる有（用×）り。臣の計の如き者は、兵を汾、潞に進め、直ちに晉陽を掩い、其の不虞（備え無し）に出でるを、上策と為すに似たり。」

周主は皆な従わず。**宏**は、**泉**（梁の元帝に事える、江陵破れ、宏は關に入る）之弟也。壬午（18+60-49+1=30日）、周主は衆六萬を帥い、直ちに河陰を指す。**楊素**は其の父（死する事170 卷太建三年にあり）の麾下を帥いて先驅せんと請い、周主は此を許す。

●**八月**、癸卯（39-19+1=21日）、周は遣使して來聘せしむ。

●**北周** **[周主は河陰を抜く]** 周師は齊の境に入り、樹を伐り稼を踐むを禁じ、犯す者は皆な斬る。丁未（43-19+1=25日）、周主は河陰の大城を攻め、此を抜く。齊王の**憲**は武濟（城に名。周の武王が紂を伐つ時、ここより河を渡る、以て名づける）を抜く。進みて洛口（洛水が黄河に入る口の城）を圍み、東、西二城を抜き、火を縦ちて浮橋を焚き、橋は絶つ。齊の永橋（河南省河北道武陟県、現・焦作市武陟県）大都督の太安の**傅伏**は、永橋より夜中渾城に入る。周人は（続は欠）既に南城に克ち、中渾（河陽に三城有り、南城・北城・中渾）を圍み、二旬にして下らず。洛州刺史の**獨孤永業**は金墉を守り、周主は自ら之を攻め、克たず。**永業**は通夜馬槽二千を辦じ、周人は之を聞き、大軍且に至らんとする以て為し而して之を憚る。

北周 ● **[周主は河陰を抜く]** 九月（元嘉曆八月閏月）、齊の右丞の**高阿那肱**は晉陽より兵を將いて周師を拒む。河陽に至り、會々周主は疾有り、辛酉（57-49+1=9日）夜、兵を引いて還る。水軍は其の舟艦を焚く（河水迅急にして、流れに浜りて西に帰れば、追兵且に至らんとす、故に其の舟艦を焚き、陸道より退き還る）。**傅伏**は行台の**乞伏貴和**に謂って曰く、

「周師は疲弊す、願わくは精騎二千を得て之を追撃せん、破る可き也。」

貴和は許さず。（10-112p）

●**北周** **[周軍の快進撃]** 齊王の**憲**、**於翼**、**李穆**は、向かう所克捷し、三十餘城を降拔し、皆な棄て而して

守らず。唯だ王薬城の要害なるを以て、儀同三司の**韓正**をして之を守ら令め、**正**は尋いで城を以て齊に降る。

●戊寅（14+60-49+1=26日）、**周主**は長安に還る。

■**北周**庚辰（16+60-49+1=28日）、齊は**趙彥深**を以て司徒と為し、**斛阿列羅**（三字姓）を司空と為す。

■**北齊**閏月（元嘉曆は九月）、車騎大將軍の**吳明徹**は兵を將いて齊の彭城を撃つ。壬辰（28-19+1=10日）、齊兵數萬を呂梁に敗る。

●甲午（30-19+1=12日）、**周主**は同州に如く。

■冬，十月，己巳（5+60-48+1=18日）、皇子の**叔齊**を立てて新蔡王と為し、**叔文**を晉熙王と為す。

■十二月，辛亥（47-47+1=1日）朔，日之を食する有り。

■壬戌（58-47+1=12日）、**王瑒**を以て尚書左僕射と為し、太子の詹事の吳郡の**陸繕**を右僕射と為す。

●庚午（6+60-47+1=20日）、**周主**は長安に還る。

高宗宣皇帝中之上太建八年（丙申，576年）

●春，正月，癸未（19-16+1=4日）、**周主**は同州（現・陝西省渭南市周辺）に如く。辛卯（27-16+1=12日）、河東の涑川（涑水は河東の聞喜県の西に出で、南して蒲坂に至りて黄河に入る）に如く。甲午（30-16+1=15日）、復た同州に還る。

■**北齊**甲寅（二月、50-46+1=5日）、齊は大赦す。乙卯（二月、51-46+1=6日）、**齊主**は鄴（去年六月に晉陽に行く）に還る。

●〔周太子の西土巡撫〕二月，辛酉（57-46+1=12日）、**周主**は太子に命じて西土を巡撫せしめ、因りて吐谷渾を伐ち、上開府儀同大將軍（建徳四年に驃騎大將軍開府儀同三司を改めて開府儀同大將軍と為し、仍ほ上開府儀同大將軍を増す）の**王軌**、宮正の**宇文孝伯**は従い行く。軍中の節度は、皆な二人に委ね、太子は成を仰ぎ而して已む。

■**北齊**齊は雜戸（魏は西涼の人を捕虜として没入して雜戸と為す。魏の武帝は關中に入り、雜戸は皆東魏に在り。北齊は之に因りて其の役に供す。周は齊を平らげ、乃ち悉く諸雜戸を放ちて百姓と為す）の**女**（統により補充）の未だ嫁せざる者を括りて悉く集め、隱匿する者有れば、家長は死に坐す。

■壬申（8+60-46+1=23日）、開府儀同三司の**吳明徹**を以て司空と為す。

●三月，壬寅（38-15+1=24日）、**周主**は長安に還る。夏，四月，乙卯（51-45+1=7日）、復た同州に如く。

■己未（55-45+1=11日）、上は太廟に享す。尚書左僕射の**王瑒**は卒す。

●五月，壬辰（28-14+1=15日）、**周主**は長安に還る。

■六月，戊申（44-44+1=1日）朔，日之を食する有り。

●辛亥（47-44+1=4日）、**周主**は太廟に享す。

■〔江總を太子の詹事と為す〕初め、太子の**叔寶**は左戸部尚書（五代志に、梁は吏部・祠部・度支・左戸・都官・五兵等の六尚書を置く。陳は梁の制に因る。左戸部の部は疑問）の**江總**を以て詹事と為さんと欲し、管記の**陸瑜**をして吏部尚書の**孔奐**に言わ令む。**奐**は**瑜**に謂って曰く、

「江は**潘**、**陸**（晉の惠帝は太子と為り、潘岳・陸機は皆東宮の官）之華有り而して**園**、**綺**（園公・綺里季は漢の太子盈を羽翼す。高帝は遂に太子を易えず）之實無し、儲宮を輔弼するは、竊に難しとする所有り。」

太子は深く以て恨みと為し、自ら**帝**に言う。**帝**は將に之を許さんとし（10-113p）、**奐**は奏して曰く、

「江總は、文華之士なり。今皇太子は文華少なからず、豈に總に藉らんや！臣愚（続は所）が見る如く、願わくは敦重之才を選び、以て輔導之職を居らしめるべし。」

帝は曰く、

「即ち卿の言の如くならば、誰か當に此に居るべけんや？」

奐は曰く、

「都官尚書の王廓は、世々懿徳有り、識性は敦敏なり、以て之に居る可し。」

太子は時に側に在り、乃ち曰く、

「廓は、王泰之子なり（父の諱を回避し、是の漢に居るべからざるをいう）、宜しく太子の詹事と為るべからず。」

奐は曰く、

「宋朝の范曄は即ち范泰之子なり、亦た太子の詹事と為る、前代疑わず。」

太子は固く之を争い、帝は卒に總を以て詹事と為す。總は、學（続は敷、江湛の子）之曾孫也。

■甲寅（50-44+1=7日）、尚書右僕射の陸縯を以て左僕射と為す。帝は孔奐を以て縯に代えんと欲し、詔は已に出、太子は之を沮みて而ち止む。更に晉陵太守の王克を以て右僕射と為す。

■〔江總を免官〕之頃^{しばらく}して、總は太子と長夜之飲を為し、良娣の陳氏を養いて女と為す。太子は亟々^{しばしば}微行し、總の家に遊ぶ。上は怒り、總の官を免ず。

●〔紀王の康を誅殺〕周の利州（五代志に、義城郡は古の晉壽なり。北魏は益州を立て、世々小益州と號す。梁は黎州と曰う。西魏は復た益州と曰い、又改めて利州と曰う。四川省嘉陵道廣元県、現・広元市利州区）刺史の紀王の康は、驕矜にして度無し、戎器を繕修し、陰に異謀有り。司録の裴融は之を諫止し、康は融を殺す。丙辰（52-44+1=9日）、康に死を賜る。

●丁巳（53-44+1=10日）、周主は雲陽に如く。

〔北齊〕〔趙彥深は卒す〕庚申（56-44+1=13日）、齊の宜陽王の趙彥深は卒す。彥深は累朝に歷事し（齊の高歡に事え、既に機密を掌る。後主に至るまで六君に事える）、常に機近に參し、溫謹を以て著稱せらる。既に卒し、朝貴の機密を典る者は、唯だ侍中、開府儀同三司の斛律孝卿一人のみ而して已む、其餘は皆な嬖倖也。孝卿は、羌舉（157 卷梁の武帝大同三年にあり）之子、餘人に比して、差貪穢（貪り汚れ）ならず。

●秋、八月、乙卯（51-43+1=9日）、周主は長安に還る。

【周の皇太子の能力】

●〔後顧の憂い断つ、吐谷渾討伐〕周の太子は吐谷渾を伐ち、伏俟城（吐谷渾の国都、漢の西海允谷鹽池、青海の西、現・青海省海南チベット族自治州共和県石乃亥郷、2018年発掘）に至り而して還る。

●〔周の太子の寵臣〕宮尹（周は太子宫尹を置く、詹事の役）の鄭譯、王端等は皆な太子に寵有り。太子は軍中に有りて徳を失うこと多く、譯等は皆な焉に預る。軍は還り、王軌等は之を周主に言う。周主は怒り、太子及び譯等を杖ち、仍って譯等の名を除き、宮臣の親幸する者は鹹な譴せられる。太子は復た譯を召し、戲狎すること初めの如し。譯は因りて曰く、

「殿下は何れの時にか天下に據るを得る可けんや？」

太子は悦び、益々之に暱む。譯は、儼（魏朝を乱り、靈太后をして良死を得ざらしめし者は鄭儼）之兄の孫也。

●〔周主は太子に嚴なり〕周主は太子を遇すること甚だ嚴なり、朝見する毎に、進止は群臣と異なる無し、隆寒盛暑と雖も、休息するを得ず。其の酒を耆^{たしな}むを以て、禁酒して東宮に至るを得ざらしむ。過ち有れば、輒ち捶撻を加える。嘗て之に謂って曰く、

「古來太子の廢せられる者幾人あるや？余兒は豈に立つに堪えざらん邪！」

乃ち東宮の官屬に敕して太子の言語動作を録し、毎月奏聞せしむ。太子は帝の威嚴を畏れ、情を矯めて修飾し、是に由りて過惡上聞せず。(10-114p)

● 〔王軌と賀若弼の太子評価〕 王軌は嘗て小内史の賀若弼（北史に云う、北人は忠貞を謂って賀若と為す。魏の孝文帝は其の先祖が忠貞の節有りしを以て、遂に賀若を以て氏と為す）と言う、

「太子は必ず負荷に克たず。」

弼は深く以て然りと為し、軌に勧めて之を陳ぜしむ。軌は後に侍坐するに因りて、帝に言つて曰く、

「皇太子は仁孝聞く無し、恐らくは陛下の家事を了せず。愚臣は短暗にして、信ず可きに足らず。陛下は恆に賀若弼を以て文武の奇才有りとす、亦た常に此を以て憂いと為す。」

帝は以て弼に問い、對えて曰く、

「皇太子は德を春宮（太子は東宮に居り、東方は春を主る、故に亦春宮という）に養い、未だ過ち有るを聞かず。」

既に退き、軌は弼を讓めて曰く、

「平生の言論は、道わざる所無し、今者對揚（揚は称なり、面對敷奏する）するに、何ぞ乃ち爾く反覆するを得るや？」

弼は曰く、

「此れ公之過ち也。太子は、國之儲副なり、豈に言を發し易からん！事蹉跌有れば、便ち族を滅すに至らん。本謂えらく公は密に臧否を陳べんと。何ぞ遂に昌言（顯言）するに至るを得る！」

軌は默然として之久しく、乃ち曰く、

「吾は心を國家に専らにし、遂に私計を存せず。向者に衆に對し、良に實に宜に非ず。」

● 〔周主は宇文孝伯に委ねる〕 後に軌は内宴（宮中の宴）に因り壽を上り、帝の須（髭）を捋りて曰く、
「愛す可し好老公、但だ後嗣の弱きを恨む耳。」

是より先、帝は右宮伯の宇文孝伯（543-579）に問いて曰く、

「吾が兒比來何如？」

對えて曰く、

「太子は比天威を懼れ、更に過失無し、酒を罷む。」

帝は孝伯を責めて曰く、

「公は常に我に語りて云く、『太子に過ち無し』と。今軌は此の言有り、公は誑かすを為す矣。」

孝伯は再拜して曰く、

「臣は聞く、父子之際は、人の言い難き所なり。（胡三省曰く、孝伯の此の言は亦之を忠切ならずと謂うべからざるなり）臣は陛下が慈を割き愛を忍ぶ能わざるを知る、遂に爾く舌を結ぶ。」

帝は其の意を知り、默然として之久しく、乃ち曰く、

「朕は已に公に委ねる矣、公は其れ之を勉めよ。」

● 〔皇太子の不適格、楊堅の天命〕 王軌は驟に帝に言つて曰く、
「皇太子は社稷の主に非ず。普六茹堅は貌に反相有り。」

帝は悦ばず、曰く、

「必ず天命在る有れば、將に之を若何せん！」

楊堅は之を聞き、甚だ懼れ、深く自ら晦匿す。

● 〔周主は皇太子を廢嫡できず〕 帝は深く軌等の言を以て然りと為す、但だ漢王の贊は次長なれども、又

た才あらず、余子は皆な幼く、故に廢せざるを得たり。

■丁卯（3+60-43+1=2 1 日）、司空の**吳明徹**を以て南兗州（五代志、江都郡に梁は南兗州を置く。北齊は改めて東廣州と為す。陳は復た南兗と曰う）刺史と為す。

北齊齊主は晉陽に如く。邯鄲宮を營す。

■九月、戊戌（34-12+1=2 3 日）、皇子の**叔彪**を以て淮南王と為す。

【北周は北齊の晉陽に侵攻】

●**〔周主は晉陽攻略を宣言〕**周主は群臣に謂って曰く、

「朕は去歲、^{たまたま}屬々疾疹（熱病）有り、遂に逋寇を克平するを得ず。前に齊の境に入り、^{つぎ}備に其の情を見るに、彼之行師は、殆んど兒戲に同じ。況んや其の朝廷昏亂し、政は群小に由る。百姓は嗷然として、朝に夕を謀らず。天與えるに取らざれば、恐らくは後の悔いを貽さん。前に河外に出で（去年の河陰の役）、（10-115p）直ちに背を拊つと為す、未だ其の喉を扼さず（漢の婁敬曰く、今人と闘うに、其の喉を扼せずして其の背を拊てば、未だ全勝する能わず）。晉州は本は**高歡**の起こる所之地（154 卷梁の武帝中大通二年にあり）なり、要重を鎮攝（攝は總持する也）す、今往きて之を攻めれば、彼は必ず來援せん。吾が軍を嚴にし以て待ち、之を撃てば必ず克たん。然る後に破竹之勢に乗りて、鼓行し而して東すれば、以て其の巢穴を窮め、文軌を混同するに足りん（記に、今天下は書は文を同じうし、事は軌を同じうす、とあるに本づく。齊の地を平郷するの意味）。」

諸將は多く行くを願わず。帝は曰く、

「機は失う可からず。吾が軍を沮む者有れば、當に軍法を以て之を裁すべし！」

●**〔周軍の進軍体制〕**冬、十月、己酉（45-42+1=4 日）、周主は自ら將に齊を伐たんとし、越王の**盛**、杞公の**亮**、隨公の**楊堅**を以て右三軍と為し、譙王の**儉**、大將軍の**竇泰**、廣化公の**丘崇**を左三軍と為し、齊王の**憲**、陳王の**純**を為前軍と為す。**亮**は、**導**之子也。

北齊**〔晉州行台左遷で守備に難あり〕**丙辰（52-42+1=1 1 日）、**齊主**は祁連池に於いて獵す。癸亥（59-42+1=1 8 日）、晉陽に還る。是より先、晉州行台の左丞の**張延雋**は、公直勤敏にして、儲侍して備え有り、百姓は業を安んず。疆場は虞い無し。諸々の嬖倖は惡み而して之を代え、是に由りて公私は煩擾す。

●**北齊****〔周は大挙して遂に平陽に克つ〕**周主は晉州（現・臨汾市 一帯）に至り、汾曲（汾水の曲り）に軍し、**齊王**の**憲**を遣わして精騎二萬を將いて雀鼠谷（水經注に、汾水は南して冠縣津を過ぎる。介休県の西南に在り。俗にこれを雀鼠谷という。数十里に道險し。山西省冀寧道介休県、現・晋中市介休市、綿山風景区か）を守らしめ、**陳王**の**純**をして歩騎二萬にて千里徑（平陽の北ならん）を守らしめ、**鄭公**の**達奚震**をして歩騎一萬にて統軍川（不明）を守らしめ、大將軍の**韓明**をして歩騎五千にて**齊子嶺**（邵郡の東）を守らしめ、**焉氏公**の**尹升**をして歩騎五千にて**鼓鐘鎮**（水經注に、教水は垣県の北教山に出で、其の水は南して鼓鐘上峽を歴、復南流して鼓鐘川を歴、西南に治官有り、世人は之を鼓鐘城と謂う、山西省河東道垣曲県、現・運城市垣曲県）を守らしめ、**涼城公**の**辛韶**をして歩騎五千にて**蒲津關**（黄河の渡し、漢の武帝元封六年に立つ、河東道永濟県の西、現・運城市永濟市）を守らしめ、**趙王**の**招**をして歩騎一萬にて**華谷**（山西省河東道聞喜県の東、現・運城市聞喜県）より**齊**の**汾州**の諸城を攻めしめ、柱國の**宇文盛**をして歩騎一萬にて**汾水關**（霍邑県の南、臨汾県の北にあるべし）を守らしむ。内史の**王誼**を遣わして諸軍を監して平陽城を攻めしむ。**齊**の行台僕射の**海昌王**の**尉相貴**は城に嬰りて拒ぎ守る。**相貴**は、**相願**之兄也。甲子（60-42+1=1 9 日）、**齊**は兵を晉祠（晉陽に晉王祠あり）に集める。庚午（6+60-42+1=2 5 日）、**齊主**は晉陽より諸軍を帥いて晉州に趣く。**周主**は日々に汾曲より城下に至りて督戦し、城中は窘急なり。庚午（6+60-42+1=2 5 日）、行台左丞

の侯子欽は出でて周に降る。壬申（8+60-42+1=27日）、晉州刺史の崔景嵩は北城を守り、夜、遣使して周に降を請い、王軌は衆を帥いて之に應ず。未明、周將の北海の段文振は、槊を杖として數十人と先ず登り、景嵩と同じく尉相貴の所に至り、佩刀を抜き之を劫かす。城上は鼓噪し、齊兵は大いに潰え、遂に晉州に克ち、相貴及び甲士八千人を虜とす。

北齊 **〔齊主は天池で急報を聞く〕** 齊主は方に馮淑妃と天池（冀寧道陽曲縣西北90里、現・太原市陽曲縣）に獵し、晉州の急を告げる者は、旦より午に至るまで、驛馬三たび至る。右丞相の高阿那肱は曰く、

「大家は正に楽しみを為す、邊鄙小小兵を交えるは、乃ち是れ常の事なり、(10-116p) 何ぞ急に奏聞せんや！」

暮に至り、使いは更に至り、云う、

「平陽は已に陥つ」

と、乃ち之を奏す。齊主は將に還らんとし、淑妃は更に一圍を殺さんと請い、齊主は之に従う。

●**北齊** **〔齊王憲は永安に屯す〕** 周の齊王の憲は攻めて洪洞（河東道洪洞縣、現・臨汾市洪洞縣）、永安（河東道霍縣、現・臨汾市霍州市）の二城を抜き、更に進取を圖る。齊人は橋を焚いて險を守り、軍は進むを得ず、乃ち永安に屯す。永昌公（郡公、五代志に、巴東郡の大昌縣に北周は永昌郡を置く）の椿をして雞棲原（永安の北）に屯せ使む、柏を伐りて庵と為し以て營を立つ。椿は、廣之弟也。

●**北齊** **〔兩軍激突〕** 癸酉（9+60-42+1=28日）、齊主は軍萬人を分けて千里徑に向かう、又た軍を分けて汾水關に出でしめ、自ら大軍を帥いて雞棲原に上る。宇文盛は人を遣わして急を告げ、齊王の憲は自ら之を救う。齊師は退き、盛は追撃して、之を破る。俄に而して椿は齊師の稍逼るを告げ、憲も復た還りて之を救う。齊と陳を對し、夜に至るも戦わず。會々周主は憲を召して還り、憲は兵を引いて夜去る。齊人は柏庵の在るを見、之を覺らず。明くる日、始めて之を知る。齊主は高阿那肱をして前軍を將いて先ず進み、仍って諸軍を節度せ使む。

●甲戌（10+60-42+1=29日）、周は上開府儀同大將軍の安定の梁士彥を以て晉州刺史と為し、精兵一萬を留めて之に鎮せしむ。

●**北齊** **〔周主は躊躇して引き返す〕** 十一月、己卯（15-11+1=5日）、齊主は平陽に至る。周主は齊兵の新たに集まり、聲勢甚だ盛んなるを以て、且く西に還り以て其の鋒を避けんと欲す。開府儀同大將軍の宇文忻は諫めて曰く、

「陛下之聖武を以（比×）て、敵人之荒縱に乗り、何ぞ克たざるを患えん。若し齊をして令主を得使め、君臣協力すれば、湯、武之勢いありと雖も、未だ平らぐるに易からざる也。今主は暗く臣は愚なり、士は鬥志無し、百萬之衆有りと雖も、實に陛下の為に奉ずる耳。」

軍正（漢の制により、軍に置く）の京兆の王紘（王韶、隋書王韶傳あり）は曰く、

「齊は紀綱を失い、茲に於いて累世なり。天は周室に獎め、一戦し而して其の喉を扼せしむ。亂れるを取り亡ぶるを侮る（書の仲虺之誥の語）は、正に今日に在り。之を釋て而して去るは、臣は未だ論らざる所なり。」

周主は其の言を善しとすると雖も、竟に軍を引いて還る。忻は、貴之子也。

●**北齊** **〔齊王憲ら追及を撃退し、周主を追及〕** 周主は齊王の憲を留めて後拒と為し、齊師は之を追い、憲は宇文忻と各々百騎を將いて與に戦い、其の驍將の賀蘭豹子等を斬り、齊師は乃ち退く。憲は軍を引いて汾を渡り、周主を玉壁に追及す。

●**北齊** **〔北齊は平陽を囲み、馮淑妃の化粧で陥落せず〕** 齊の師は遂に平陽を圍み、晝夜之を攻める。城中は危急し、樓堞（物見櫓と城の短垣）は皆な盡き、存する所の之城は、尋^{じんじん}仞（六尺は尋、七尺は仞）而して已む。或

は短兵（槍槊の兵）相い接し、或は馬を交えて出入す。外援は至らず、衆は皆な震え懼る。梁士彦は慷慨して自若とし、將士に謂って曰く、

「死は今日に在り、吾は爾の先と為る。」

是に於いて勇烈^{ひと}齊しく奮い、呼聲は地を動かし、一は百に當たらざる無し。齊の師は少しく卻き、乃ち妻妾、軍民、婦女をして、晝夜城を修め令め、三日に而して就る。周主は齊王の憲をして兵六萬を將いて涑川に屯し、遙かに平陽の聲援と為さ使む。齊人は地道を作りて平陽を攻め、城陷ちること十餘歩、將士は勢いに乗りて（10-117p）入らんと欲す。齊主は敕して且く止め、馮淑妃を召して之を觀しむ。淑妃は妝點（化粧）し、時に至らず。周人は木を以て之を拒塞し、城は遂に下らず。舊俗は相い傳え、晉州城の西の石上に聖人の跡有りと。淑妃は往きて之を觀んと欲す。齊主は弩矢の橋に及ぶを畏れ、乃ち攻城の木を抽き遠橋（旧橋は城に近し）を造る。齊主は淑妃と橋を度り、橋は壞れ、夜に至りて乃ち還る。癸巳（29-11+1=19日）、周主は長安に還る。

【齊主は馮淑妃に戯れて敗北】

●北齊【周主は再出馬、平陽に対す】甲午（30-11+1=20日）、復た詔を下し、齊人が晉州を圍むを以て、更に諸軍を帥いて之を撃つ。丙申（32-11+1=22日）、齊の降人を縦ちて還ら使む（齊の師に周の師が来るを知らせて畏れさせ、平陽の守者に援軍あるを知らせるため）。丁酉（33-11+1=23日）、周主は長安を發す。壬寅（38-11+1=28日）、河を濟り、諸軍と合す。十二月、丁未（43-41+1=3日）、周主は高顯（涑川に近し）に至り、齊王の憲を遣わして所部を帥いて先ず平陽に向かわしむ。戊申（44-41+1=4日）、周主は平陽に至り、庚戌（46-41+1=6日）、諸軍は總集し、凡そ八萬人、稍く進み、城に逼りて陳を置くこと、東西二十餘里なり。

●北齊【周主は善く軍を統率す】是より先、齊人は周の師の猝に至るを恐れ、城南に於いて塹を穿ち、喬山（平陽城の北にあるべし）より汾水に屬す。齊主は大いに出兵し、塹の北に於いて陳し、周主は齊王の憲に命じて馳せ往きて之を觀しむ。憲は覆命して曰く、

「與^{くみ}し易し耳、請う之を破り而る後に食わん。」

周主は悦び、曰く、

「汝の言の如く、吾は憂い無し矣！」

周主は常御の馬に乗り、數人を從えて陳を巡り、至る所輒ち主帥の姓名を呼びて之を慰勉す。將士は見知するを喜び、鹹な自ら奮わんと思う。將に戦わんとし、有司は馬を換えるを請う。周主は曰く、

「朕は獨り良馬に乗りて、何に之かんと欲するや！」

周主は齊の師に薄^{せま}らんと欲し、塹に礙^{さまた}げられ而して止む。旦より申に至りて、相い持ちて決せず。

●北齊【齊主の優柔不断と側近の無能】齊主は高阿那肱に謂って曰く、

「戦うは是なる邪？戦わざるは是なる邪？」

阿那肱は曰く、

「吾が兵は多しと雖も、戦いに堪える者は十萬に過ぎず、病傷及び城を繞りて樵爨する者は復た三分して一に居る。昔玉壁を攻め（159 卷梁の武帝中大同元年にあり）、援軍來たりて即ち退く。今日の將士は、豈に神武（高歡）の時に勝らん邪！如かず戦う勿く、卻きて高粱橋（平陽城の東北）を守るべし。」

安吐根は曰く、

「一撮（其の軍少なしをいう。兵勢を知らずして敵を輕んじて大言する者、未だ敗れザル者はなし）^{ばか}許りの賊は、馬上に刺し取り、汾水の中に擲著せん耳！」

齊主の意は未だ決せず。諸々の内参は曰く、「彼も亦た天子なり、我も亦た天子なり。彼は尚ほ能く遠く來たる、我は何為れど塹を守りて弱きを示すや！」

齊主は曰く、

「此の言は是也。」

是に於いて塹を填めて南に引く。周主は大いに喜び、諸軍を勅して之を撃つ。

●北齊〔馮淑妃と觀戦し、齊軍は瓦解〕兵才かに合うや、齊主は馮淑妃と騎を並べて觀戦す。東偏は小しく卻き、淑妃は怖れて曰く、

「軍は敗れる矣！」

錄尚書事の城陽王の穆提婆は曰く、

「大家去れ！大家去れ！」

齊主は即ち淑妃を以て高梁橋に奔る。開府儀同三司の奚長は諫めて曰く、

「半は進み半ば退くは、戦い之常體なり。今兵衆は全く整い、未だ虧傷有らず、陛下は此を捨てて安くにくや！馬足一たび動けば、人情は駭亂し、復た振う可からず。願わくは速かに還りて（10-118p）之を安慰すべし！」

武衛（左右武衛將軍）の張常山は後ろより至り、亦た曰く、

「軍は尋いで收め訖わり、甚だ完整す。城を圍む兵も亦た動かず。至尊は宜しく回るべし。臣の言を信ぜざれば、乞う内参を將いて往き視るべし。」

齊主は將に之に従わんとす。穆提婆は齊主の肘を引いて曰く、

「此の言は信じ難し。」

齊主は遂に淑妃を以て北に走り。齊の師は大いに潰え、死者は萬餘人、軍資器械は、數百里間、委棄して山積す（稽胡がこれを取り、周はまたこれを討つ）。安德王の延宗は獨り軍を全くし而して還る。（胡三省曰く、延宗は亂に在りて能く整う。未だ易からざる才なり。大廈將に顛れんとするは一本の支える所に非ざるを惜しむのみ）

北齊〔馮淑妃を皇后に〕齊主は洪洞に至り、淑妃は方に粉鏡を以て自ら遊び（化粧し鏡を見て自己陶醉す）、後聲は賊至ると亂唱し、是に於いて復た走る。是より先、齊主は淑妃を以て功勳有りと為し、將に左皇后に立てんとし、内参を遣わして晉陽に詣りて皇后の服御禕翟（雉の模様のある王後の服）等を取らしむ。是に至り、中塗に遇い、齊主は為に轡を按じて、淑妃に命じて之を著けしめ、然る後に去る。

●〔平陽感動の再会〕辛亥（47-41+1=7日）、周主は平陽に入る。梁士彦は周主を見、周主の須（髭）を持ち而して泣きて曰く、

「臣は幾んど陛下を見ざらんとせり！」

周主も亦た之が為に流涕す。

●北齊〔梁士彦の諫言で、追撃〕周主は將士の疲倦（続は疲弊）を以て、引いて還らんと欲す。士彦は馬を叩いて諫めて曰く、

「今齊師は遁れ散じ、衆心は皆な動く。其の懼れるに因り而して之を攻めれば、其の勢いは必ず舉がらん。」

周主は之に従い、其の手を執りて曰く、

「余は晉州を得、齊を平らぐる之基と為る、若し固く守らざれば、則ち大事は成らず。朕は前に憂い無し、唯だ後變を慮る、汝は善く我の為に之を守れよ！」

遂に諸將を帥いて齊の師を追う。諸將は固く西に還るを請い、周主は曰く、

「敵を縦せば患いは生じん。卿等若し疑えば、朕は將に獨り往かん。」

諸將は乃ち敢えて言わず。癸丑（49-41+1=9日）、汾水關に至る。

【高延宗奮闘も、晉陽陥落】

●**北齊** **〔齊主は突厥に走らんとす〕** 齊主は晉陽に入り、憂懼して之く所を知らず。甲寅（50-41+1=10日）、齊は大赦す。齊主は計を朝臣に問い、皆な曰く、

「宜しく賦を省きて役を息め、以て民心を慰めるべし。遺兵を収め、城を背にして死戦すれば、以て社稷を安んずるべし。」

齊主は安徳王の延宗、廣寧王の孝珩を留めて晉陽を守り、自ら北朔州（北魏の太和中に朔州を定襄の故城に置く。

東魏の天保中に馬邑の西南に朔州を置く、相去る事380里。故に定襄の故城の朔州は北朔州の称あり。定襄は山西省雁門道定襄県、現・忻州市定襄県。馬邑は山西省雁門道朔県の西北、現・朔州市朔城区）に向かわんと欲す。若し晉陽守らざれば、則ち突厥に奔らんとす、群臣は皆な以て不可と為し、帝は従わず。

北齊● **〔北齊軍の瓦解始まる〕** 開府儀同三司の賀拔伏恩等宿衛の近臣三十餘人は西に周軍に奔り、周主は封賞各々差有り。

北齊● **〔高阿那肱の謀反はいかに〕** 高阿那肱は所部の兵尚ほ一萬あり、高壁（嶺の名、雀鼠谷の南、山西省河東道靈石県の東南、現・晋中市靈石県）を守り、餘衆は洛女砦を保つ。周主は軍を引いて高壁に向かい、阿那肱は風を望みて退き走る。齊王の憲は洛女砦を攻め、之を抜く。軍士の阿那肱の遣臣を稱して西軍を招引せんと告げる者有り、齊主は侍中の斛律孝卿をして檢校せ令め、孝卿は以て妄と為す。還りて、晉陽に至り、阿那肱の腹心は復た阿那肱の謀反を告げ、又た以て妄と為し、之を斬る。

北齊 **〔逃げ腰の齊主〕** 乙卯（51-41+1=11日）、齊主は安徳王の延宗、廣寧王の孝珩に詔して兵を募らしむ。延宗は入りて見え、齊主は告げるに北朔州に向かわんと欲すを以てす、（10-119p）延宗は泣いて諫め、従わず、密に左右を遣わして先ず皇太后、太子を北朔州に送らしむ。

北齊● 丙辰（52-41+1=12日）、周主は齊王の憲と介休（山西省冀寧道介休県、現・晋中市介休市）に會す。齊の開府儀同三司の韓建業は城を擧げて降り、以て上柱國と為し、郇（故の国）公に封じる。

北齊● **〔突厥逃亡に失敗し、鄴に奔る。周は晉陽占領〕** 是の夜、齊主は遁げ去らんと欲し、諸將は従わず。丁巳（53-41+1=13日）、周の師は晉陽に至る。齊主は復た大赦し、改元して隆化とす。安徳王の延宗を以て相國、并州刺史と為し、山西の兵を總ぜしめ、謂って曰く、

「并州の兄自ら之を取れ、兒は今去らん矣！」

延宗は曰く、

「陛下は社稷の為に動く勿れ。臣は陛下の為に死力を出して戦わん、必ず能く之を破らん。」

穆提婆は曰く、

「至尊の計は已に成る、王は輒ち沮むを得ず！」

齊主は乃ち夜五龍門を斬り而して出で、突厥に奔らんと欲し、從官は多く散ず。領軍の梅勝郎は馬を叩いて諫め、乃ち回りて鄴に向かう。時に唯だ高阿那肱等十餘騎は従い、廣寧王の孝珩、襄城王の彥道は繼ぎて至り、數十人を得て與に俱にす。

北齊● **〔投降者続々、陸令萱は自殺〕** 穆提婆は西に周軍に奔り、陸令萱は自殺し、家屬は皆な誅没す。周主は提婆を以て柱國、宜州刺史と為す。下詔して齊の群臣を諭して曰く、

「若し妙しく人謀を盡くし、深く天命に達し、官榮爵賞は、各々加え隆める有り。或は我之將卒、彼の朝

に逃逸すれば、貴賤を問う無く、皆な蕩滌に従わん。」

是より齊の臣の降る者は相い繼ぐ。

北齊 **唐邕は晉陽に残留** 初め、齊の**高祖**（高歡）は魏の丞相と為り、**唐邕**を以て外兵曹を典り、太原の**白建**をして騎兵曹を典り、皆な書計に善く、簿帳に工^{たくみ}なるを以て委任を受ける。齊の禪を受けるに及び、諸司は鹹な尚書に歸す。唯だ二曹は廢さず、更に二省と名づける。**邕**の官は錄尚書事に至り、**建**の官は中書令に至り、常に二省を典り、世は「**唐、白**」と稱す。**邕**は領度支を兼ね、**高阿那肱**と隙有り、**阿那肱**は之を譖し、**齊主**は侍中の**斛律孝卿**に敕して騎兵、度支を總知せしむ。**孝卿**は事多く專決し、復た詢稟（相談）せず。**邕**は自ら以えらく、舊事を宿習す（宿舊習事×）と、**孝卿**の輕んずる所と為り、意は甚だ鬱鬱たり。**齊主**の鄴に還るに及び、**邕**は遂に晉陽に留まる。

北齊 **延宗は皇帝即位** 并州の將帥は安徳王の**延宗**に請いて曰く、

「王は天子と為らざれば、諸人は實に王の為に死力を出す能わず。」

延宗は已むを得ず、戊午（54-41+1=14日）、**皇帝**に即位す。下詔して曰く、

「武平（齊主の年号）^{せんじやく}孱弱（弱々しい）たり、政は宦豎に由る、斬關を斬りて夜遁げ、之く所を知る莫し。王公卿士は、猥りに推逼せられ、今祇に實位を承けん。」

大赦し、改元して德昌とす。晉昌（五代志に、西城郡石泉県に旧晉昌郡を置く、陝西省漢中道石泉県、現・安康市石泉県）王の**唐邕**を以て宰相と為し、齊昌（五代志に、後齊は蕪春郡蕪春県に齊昌郡を置く、湖北省江漢道蕪春県、現・黄冈市蕪春県）王の**莫多婁敬顯**、沔陽（五代志に、東魏は東海郡沔陽県に沔陽郡を置く、江蘇省徐海道沔陽県、現・宿遷市沔陽県）王の**和阿干子**、右衛大將軍の**段暢**、開府儀同三司の**韓骨胡**等を將帥と為す。**敬顯**は、**貸文**（莫多婁貸文が戦死すること158卷梁の武帝大同四年にあり）之子也。衆は之を聞き、召さず而して至る者は、前後相い^{つづ}屬く。**延宗**は府藏及び後宮の美女を發して以て將士に賜い、内參十餘家を籍沒す。**齊主**は之を聞き、近臣に謂って曰く、

「我は寧ろ周をして并州を得使めん、**安徳**が之を得るを欲せず。」（10-120p）

左右は曰く、

「理は然り。」

延宗は士卒を見、皆な親ら手を執りて名を稱し、流涕嗚咽し、衆は争いて為に死せんとす。童兒女子も、亦た屋に乗り袂を攘い、磚石（瓦と石）を投げ以て敵を禦ぐ。

●**北齊** **周主は晉陽突入、九死に一生を得る** 己未（55-41+1=15日）、**周主**は晉陽に至る。庚申（56-41+1=16日）、**齊主**は鄴に入る。周軍は晉陽を圍み、四合して黒雲の如し（周の戎衣及び旗幟は皆黒く、且つ兵多き様）。安徳王の**延宗**は**莫多婁敬顯**、**韓骨胡**に命じて城南に拒がしめ、**和阿干子**、**段暢**は城東を拒がしめ、自らは衆を帥いて齊王の**憲**を城北に拒ぐ。**延宗**は素より肥え、前は偃すが如く、後ろは伏すが如し、人は常に之を笑う。是に至り、大槩を奮いて往來して督戦し、勁捷にして飛ぶが若く、向かう前無し。**和阿干子**、**段暢**は千騎を以て周の軍に奔る。**周主**は東門を攻め、昏の際に、遂に之に入り、進みて佛寺を焚く。**延宗**、**敬顯**は門より入り、之を夾撃す。周師は大いに亂れ、門を争い、相い^{てんあつ}填壓し、路を塞いで進むを得ず。齊人は後ろより斫刺し、死者は二千餘人なり。**周主**の左右は略ぼ盡き、自ら抜くに路無し。承御上士（左右の侍衛）の**張壽**は馬首を牽き、**賀拔伏恩**は鞭を以て其の後を拂い、**崎嶇**（困難な貌）として出ずるを得たり。齊人は奮撃し、幾んど之に中たらんとす。城東の道は阨曲（狭く曲がる）し、**伏恩**及び降者の**皮子信**は之を導き、僅に免かるるを得たり、時は已に四更。**延宗**は謂えらく**周主**は亂兵の殺す所と為ると、積屍中に於いて長鬣（髭）者（周主の長鬣は知られていた）を求め使めるも得ず。時に齊人は既に捷つ。坊に入りて飲酒し、盡く醉臥し、**延宗**は復た整える能わず。

●**〔周主は兵を駐めて再編〕**周主は城を出、饑え甚しく、遁れ去らんと欲し、諸將も亦た多く之に還らんことを勧める。宇文忻は勃然として進んで曰く、

「陛下は自ら晉州に克ち、勝ちに乗りて此に至る。今**偽主**は奔波し、關東は響震す、古より兵を行なうに、未だ斯之若きの盛んなる有らず。昨日城を破り、將士は敵を輕んじ、微かに不利有るも、何の懷と為すに足らん！丈夫は當に死中に生を求め、敗中に勝ちを取るべし。今破竹之勢いは已に成り、奈何して之を棄て而して去るや！」

齊王の**憲**、柱國の**王誼**も亦た以為く、

「去れば必ず免れざらん」(逃げれば追われて危ない)

と、**段暢**等も又た盛んに城内の空虛を言う。**周主**は乃ち馬を駐め、角を鳴らして兵を収め、俄に頃して復た振う。

●**〔北齊〕〔周主は再戦して延宗を獲る〕**辛酉(57-41+1=17日)、旦、還りて東門を攻め、之に克つ。**延宗**は戦いて力屈し、走りて城北に至り、周人は之を擒とす。**周主**は下馬して其の手を執り、**延宗**は辭して曰く、

「死人の手、何ぞ敢えて**至尊**に迫らん！」

周主は曰く、

「兩國の天子は、怨惡有るに非ず、直だ百姓の為(民を救う為)に來たる耳。終に相い害さず、怖れる勿かれ也。」

衣帽(五代志に、帽は天子より下、庶人に及ぶまで通じて之を冠す。蓋し常服なり。然れども亦、白紗・烏紗の異有り、又繒・卑緇紗をもて之を為る者有り)を復せ使め而して之に禮す。**唐邕**等は皆な周に降る。獨り**莫多婁敬顯**は鄴に奔り、**齊主**は以て司徒と為す。

〔北齊〕〔任城王湝は齊に忠実〕**延宗**は初め尊號を稱し、遣使して啟を瀛州(北魏は河間に置く)刺史の任城王の**湝**に修めて、曰く、

「**至尊**は出奔す、宗廟の事は重く、群公は勸め迫り、^{かり}權に號令を主る。事寧んずれば、終に叔父に歸せん。」

湝は曰く、

「我は人臣なり、何ぞ此の啟を受ける容けんや！」

使者を執りて鄴に關送(続は送)す。(10-121p)

●壬戌(58-41+1=18日)、**周主**は大赦し、齊の制を削除す。文武之士を收禮す。

●**〔北齊〕〔伊婁謙と高遵の交流〕**初め(続は鄴、これ誤り)**伊婁謙**は齊に聘し(伊婁謙をして齊に聘すは去年二月にあり)、其の參軍の**高遵**は情(情報)を以て齊に輸し(周は伊婁謙に齊の偵察をさせた)、齊人は之を晉陽に拘う。**周主**は既に晉陽に克ち、**謙**を召し、之を^{いたわ}勞る。**遵**を執りて**謙**に付し、其の報復するに任す。**謙**は頓首し、之を赦さんことを請い、**周主**は曰く、

「卿は衆を聚めて面に唾する可し、其の愧を知ら使むべし。」

謙は曰く、

「**遵**之罪を以てすれば、又た面に唾して責める可きに非ず。」

帝は其の言を善しとし而して止む。**謙**は**遵**を待すること初めの如し。

■**臣光**曰く、有功を賞し、有罪を誅するは、此れ人君之任也。**高遵**は異國に奉使し、大謀を漏洩するは、斯れ叛臣也。周の**高祖**は自ら戮を行なわず、乃ち以て**謙**に賜い、之をして怨を復さ使むるは、政刑を失す

るなり矣！孔子は謂えらく、徳を以て怨に報いる者、何を以て徳に報いんや？謙^た為る者は、宜しく辭し而して受けず、諸を有司に歸し、以て典刑を正すべし。乃ち請い而して之を赦し以て其の私名を成す、美は則ち美なるも矣、亦た公義に非ざる也。

【鄴の齊主の瓦解】

北齊 **〔齊主に愛想尽かす〕** 齊主は命じて重賞を立て以て戰士を募らすも、而も竟に物を出さず。廣寧王の孝珩は請う、

「任城王の潛をして幽州道の兵を將いて土門に入り、并州に趣くと揚聲せしめ、獨孤永業をして洛州道の兵を將いて潼關に入り、長安に趣くと揚聲せしめ、臣は請う、京畿の兵を將いて滏口に出、鼓行して逆え戦わん。敵は南北に兵有るを聞けば、自然に逃潰せん。」

又た請う、

「宮人珍寶を出して將士を賞せん。」

と、齊主は悦ばず。斛律孝卿は齊主に親ら將士を勞るを請い、之が為に辭を撰し、且つ曰く、

「宜しく慷慨流涕し、以て人心を感激せしめん。」

齊主は既に出で、衆に臨み、將に之に令せんとし、復た受ける所の言（斛律孝卿の作る辭）を記せず、遂に大いに笑い、左右も亦た笑う。將士は怒りて曰く、

「身は尚ほ此くの如し、吾が輩は何ぞ急せん！」

皆な戰心無し。是に於いて大丞相より已下、太宰、三師、大司馬、大將軍、三公等の官（北齊の官制は多く北魏に循う。大丞相・太宰が位望最も崇重。太師・太傅・太保の三師は次。大司馬・大將軍を二大と為す。津銀大尉・司徒・司空を三公と為す、其の階は皆正一品なり）、並びに員を増し而して授け、或は三或は四、勝げて數える可からず。

北齊 **〔高勣の正義感〕** 朔州行台僕射の高勣は兵を將いて太后、太子に侍衛し、土門道より鄴に還る。時に宦官の儀同三司の荀子溢^{しいつ}は猶ほ寵を恃みて縦暴し、民間の雞彘^{はくぜい}、鷹犬を縦ちて搏噬（むさぼり食う）して之を取る。勣は執えて以て^{とな}洵え、將に之を斬らんとす。太后は之を救い、免かるるを得る。或は勣に謂つて曰く、

「子溢之徒、言は禍福を成す、獨り後患を慮らず邪？」

勣は袂を攘いて曰く、

「今西寇（周の侵入）は已に并州に據り、達官（位任有りて時に光顯なる者）は率ね皆な委叛（官を棄てて叛き去る）するは、正に此の輩（宦官）が朝廷を濁亂するに坐す。若し今日之を斬るを得れば、明日誅を受けるとも、亦た恨む所無し！」

勣は、岳（高歡と兵を起こす）之子也。甲子（60-41+1=20日）、齊の太后は鄴に至る。（10-122p）

● **〔周主は鄴を落とす策を高延宗に問う〕** 丙寅（2+60-41+1=22日）、周主は齊の宮中の珍寶服玩及び宮女二千人を出して、將士に班け賜い、功を立てる者に官爵を加えること各々差有り。周主は高延宗に問うに鄴を取る之策を以てし、辭して曰く、

「此れ亡國之臣の及ぶ所に非ず。」

強く之を問い、乃ち曰く、

「若し任城王が鄴に據れば、臣は知る能わず。若し今主自ら守れば、陛下の兵は刃を血ぬらず。」

癸酉（9+60-41+1=29日）、周師は鄴に趣き、齊王の憲に命じて先驅せしめ、上柱國の陳王の純を以て并州總管と為す。

●**北齊**〔**齊主は高勸の策用いず**〕**齊主**は諸貴臣を引いて朱雀門（鄴の宮城の正南門）に入り、酒食を賜い、問うに周を御ぐ之策を以てし、人人は議を異とし、**齊主**は従う所を知らず。是の時人情は恟懼し、鬥心有るもの莫く、朝士は出で降り、晝夜相い屬く。**高勸**は曰く、

「今之叛者は、多く是れ貴人なり、卒伍に至りては、猶ほ未だ離心あらず。請う五品已上（尚書郎・中書侍郎・諫議大夫・九寺少卿・給事黃門侍郎・通直散騎常侍・尚書左右丞・三公府長史・諮議參軍・太子三卿・直閣將軍・東宮正・都督以上）の家屬を追いて、之を三台（魏の武帝が建て、齊の文宣帝は増崇す、時に改めて寺と為す）に置き、因りて之を脅して以て戦えば、若し捷たざれば、則ち台を焚かん。此の曹は妻子を顧み惜しみ、必ず當に死戦せん。且つ王師は頻りに北^にげ、賊徒は我を輕んず、今城を背にして一決すれば、理として必ず之を破らん。」

齊主は用いる能わず。氣を望む者は言う、

「當に革易有るべし。」

齊主は尚書令の**高元海**等を引いて議し、天統の故事（天統に位を讓る事 169 卷世祖天嘉六年にあり）に依り、位を**皇太子**に禪る。

令和 5 年 8 月 11 日 9170 文字

令和 5 年 8 月 17 日 20806 文字